

研究機関名：東北大学

受付番号： 2014-1-638
研究課題名 肩関節前方不安定症患者における Hill-Sachs 損傷と関節窩骨欠損の CT データを使用した 3 次元的検討
研究期間 西暦 2015 年 1 月（倫理委員会承認後）～ 2017 年 1 月
対象材料 <input type="checkbox"/> 病理材料（対象臓器名 ） <input type="checkbox"/> 生検材料（対象臓器名 ） <input type="checkbox"/> 血液材料 <input type="checkbox"/> 遊離細胞 <input type="checkbox"/> その他（ 肩関節術前 CT データ ） 上記材料の採取期間 西暦 2006 年 3 月～2011 年 9 月
意義、目的 Hill-Sachs 損傷（HSL）は肩関節前方脱臼に高頻度に合併することが知られており、大きな HSL は術後再脱臼のリスク因子であることが指摘されている。HSL は骨頭が関節窩縁に圧迫されて生じた陥没骨折であり、いわゆる脱臼肢位（肩関節 90 度外転最大外旋位）で生じると一般的に信じられている。しかし、一方で患者が救急外来を受診する時、決して外転外旋位の肢位で来院するわけではなく、軽度外転かつ内旋位になっているのは多くの整形外科医が経験している。その肢位もしくはその肢位になるまでに HSL ができたと仮定すると、HSL が生じる肢位は外転外旋位ではなく、もっと低い外転角度および小さい外旋角度であることが推測される。しかし、これまで HSL がいつどの肢位で生じたのかを明らかにした報告はない。HSL は骨頭が関節窩前縁に圧迫されることで作られるため、HSL と関節窩前縁をかみだませた時の肢位は HSL が生じる肢位と考えられる。また、大きい関節窩骨欠損は肩関節前方脱臼のリスクの因子と知られており、その計測方法には、関節窩の内接円を使う方法と、健側の関節窩と比較する方法があるが、その 2 つの計測方法の精度について比較した報告はない。 本研究の目的は反復性肩関節脱臼患者の 3 次元 CT 画像モデルを用いて HSL が生じる肢位を明らかにすることである。また、関節窩骨欠損を内接円を使う方法と健側と比較する方法の精度を比較することである。
方法 本研究の対象は 2006 年 3 月～2011 年 9 月に東北大学病院整形外科で肩関節不安定症に対して手術を行った患者の術前 CT データである。CT の DICOM データは連結可能匿名化を施した後、コンピュータへ取り込んで計測を行う。
問い合わせ・苦情等の窓口 東北大学整形外科、仙台市青葉区星陵町 1-1、022-717-7245、山本 宣幸、川上 純